

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.26-3 (通巻 76号) 2019.3.1 発行



『週刊アンポ』No.1 (18.0 × 25.5cm)
P6 三年目のメディア資料研究会に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの收藏品 73	パンフレット：日本万国博 VOL.7
02	巻頭つれづれ	「そだねー」と「さもありません」と 「むべなるかな」の間
04	平和教育研究	平和博物館における戦争体験継承のための 展示モデル構築
05		京都欧州人権セミナーを通じての人権問題の共同研究と国際ネットワーク 学術講演会「欧州憲法アーキテクチャにおける 州憲法裁判所の役割」
06		三年目のメディア資料研究会
07	運営委員リレー連載	「原発事故による被害・影響の多様性と語りえぬ受苦」
09	ミュージアムおすすめの一冊	『老いの近代』
10	事業報告	

パンフレット：日本万国博 VOL.7

この資料は、1970年の大阪万国博覧会のアピールのため、日本万国博覧会協会が発行していた会報です。この号(第7号)では、万博の準備状況やテーマ展示の特集、当時の著名人によるエッセイ等を掲載し、万博がテーマとした「人類の進歩と調和」が謳う1970年という未来を描き出そうとしています。

冒頭のカラーレポートでは「モントリオールから大阪へ万国博の舞台は移った」と題して、モントリオール万博の成功や、70年万博の3プロデューサー(基幹施設プロデューサー丹下健三、テーマ展示プロデューサー岡本太郎、催し物プロデューサー伊藤邦輔)の活躍を紹介しています。カナダ建国100周年事業として1967年に開催されたモントリオール万博は、5,000万人の来場者(当時のカナダ人口は2,000万人)を集める成功で、現在でも多くのカナダ人が記憶する国民的な出来事となりました。

特集・「テーマ展示」は、岡本太郎の構想をイラストと文章で紹介(下記画像参照)するものです。「科学の力を媒体とし、進歩への期待を前提とした万国博は、すでに役割を終えたように思われる。そこで、我々はむしろ、象徴的、風刺的に、人類の進みゆく道、運命を示唆するようなものを作りたい」として、太陽の塔をはじめとする構想を打ち出しています。

また、誌面には「万国博はわれわれに何をもたらすか 文化的視点から」(仁戸田六三郎)や、「万国博が開く1970年代未来の教育」(小野周)も掲載されています。

当時、名物宗教学者として知られていた仁戸田六三郎は、万博はポスト産業社会において東西文明の融合を体現する場であり、日本と世界の文化史上に金字塔を打ち立てるとしています。物理学者の小野周は、コンピュータによる情報化が進み、哲学や倫理の無いまま教育がその波に飲まれることを危惧しています。1980年代に原発事故の危険性を指摘する共著を著し

た当館名誉館長安齋育郎によれば小野は「将来を見据えて本質を捉え、確固として主張する」人物でありこの文章もそうした側面がうかがわれます。

多様な人々が同じ方向を向いた(所々、顔に代わり国旗が描かれています)表紙イラストは、灘本唯人によるものです。灘本は、1964年に和田誠、横尾忠則、宇野亜喜良と東京イラストレーターズ・クラブを

結成、日本に「イラストレーター」という言葉を持ち込んで普及させ、広告、宣伝美術などの分野を牽引した存在でした。個性的な女性の描き方が特徴で、ポスター、本や雑誌の表紙、挿絵などを多数手がけました。

この作品については、「人類の進歩と調和という大変抽象的

なテーマなのですが、世界の祭りに世界の人間が参加するという、ごく平凡な発想から表紙ができました。戦争もなく、人種差別もない当然の平和が、この万国博を通じて強烈に訴えることができればと願っています。」との言葉を寄せています(「表紙の言葉」)。

日本万国博覧会の開催は、東京オリンピックが開催された1964年の2月に国会に提案され、大阪が開催誘致の要望書を提出し、8月には開催を推進する閣議決定がなされました。オリンピックと万博は戦後の復興を象徴する出来事として広く記憶されています。万博は当初の予想3,000万人(その後5,000万人に修正)を上回る6,400万人以上が来場し、国家イベントとして多方面で成功を収めました。アジア初の開催となったこの万博は、正式には1940年に予定されていた万博の30年遅れの開催でした。日本は1940年に皇紀2600年記念行事としてオリンピックと万博の開催を計画していましたが、日中戦争が本格化し、1938年にオリンピックは開催返上、万博は無期延期を決定しました。東京島島での開催を予定していた1940年万博はすでに前売り入場券が70万枚発売されており、1970年万博では、これを用いた入場が認められ、実際に3,000枚が使われたそうです。

『万国博への招待』1970年、毎日新聞社
暮澤剛己他著『幻の万博』2018年、青弓社
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/banpaku/page6.html>

(学芸員 兼清順子)



『日本万国博』VOL.7 (28.2cm × 20.9cm)
1968年2月発行



『日本万国博』VOL.7 P.25

巻頭 つれづれ

「そだねー」と「さもありなん」と 「むべなるかな」の間

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

「そだねー」騒動

漫画家の森田拳次さんから年賀状が来ました。干支のイノシシ君がピアノを弾きながら「ドレミファ♪」と歌って、「その次、何だっけ？」と向こう側に立つロボタンに聞きます。答えは当然、「ソだねえ」というわけ。ロボタンは半世紀も前に森田拳次さんが世に送り出したキャラクターですから、年配者以外には馴染みが薄いかもかもしれません。

「2018 ユーキャン新語・流行語大賞」(『現代用語の基礎知識』選)で大賞に選ばれた「そだねー」は、同年2月の平昌オリンピックに出場したカーリング女子チームがゲーム中や作戦会議で多用した言葉ですが、「不寛容な時代と言われ、SNSでの反応を過剰に気にして疲弊する昨今、トップ・アスリートから発せられるのんびりとしたやりとりはほっとするひと時をもたらしてくれた」というのが受賞理由のようです。当のカーリング・チームは一般社団法人「ロコ・ソラーレ」が運営する「LS北見」ですが、知床半島～網走～サロマ湖と続く北海道北部の北見市常呂町が本拠地です。チーム名は、「ローカル」と「常呂っ子(ところっこ)」からとった「ロコ」に、イタリア語の「ソラーレ」(太陽)を加えて命名されたそうです。

日本語学の専門家で、北海道方言研究会長を務める菅泰雄教授(北海学園大学)によると、北海道の話し言葉には、東北地方の影響を受ける海岸方言(浜言葉)と、明治以降に全国から移住した開拓者によって形成された内陸方言の影響があると言います。「そだねー」は、常呂町に残る浜言葉「そんだね」に共通語が混ざって出来たのではないかと、菅教授は考えています。

さもありなん

一杯飲みながら話し相手に「同意」の意思を伝えるには、「そうそう」「同感!」「賛成!」「確かに」「ほんと」などいろ

いろありますが、ちょっと古い表現には「さもありなん」という言い方がありました。「彼の受賞は日頃の努力の賜物であり、『さもありなん』と感じたね」とか、「清水さんの主張は非常に論理的で、『さもありなん』と思うところが多かった」などと、現代の会話の中でも使われなくもありません。

「さもありなん」の意味は、「その通りだろう」「きっとそうだろう」などというところですが、状況によっては「そうであるに違いなからう」「そのようになるだろう」といったニュアンスで、これから起こる状況についての見立てにも使われます。

文法的に分解すると、さ(=そう、状態を表す副詞)+も(係助詞)+あり(ラ変動詞「あり」の終止形)+な(完了の助動詞「ぬ」の未然形)+む(推量の助動詞)という結構複雑な構成ですが、まあ、この表現を使う人は、誰もそんなことは考えないでしょう。英語では“it's probably so”, “it stands to reason”といった訳が当てられますが、「さもありなん」がもつ韻律的心地良さには到底及ばないように思います。

むべなるかな

もう少し時代を遡ると、相手の主張に同意する表現として「むべなるかな」という言い方もありました。いわゆる「大和言葉」と言われるものの一つで、意味は「もつともなことだなあ」「いかにもその通りだ」「なるほど、そうだったのか」といったところ。これも日常会話の中でストレートに使われることは現代社会ではまずなくなりましたが、「根拠を示して明快に説明した山田君の解説には『むべなるかな』と納得したね」といった具合に、納得感を強調するために「むべなるかな」を一塊の名詞慣用句のように使うことが今でもあります。

「むべなるかな」という表現の発祥については、有名な物語があります。

その昔、狩りに出かけた天智天皇(626年～672年、中大兄皇子)が現在の近江八幡市付近の琵琶湖のほとりで、8人の息子をもつ元気な老夫婦と出会い、「汝ら如何に斯く長寿ぞ」(あなた方はどうしてこのように長生きなのか)と尋ねたところ、夫婦は地元産のある果物が「無病長寿の霊果」であり、秋にこれを食べることが長寿の秘訣だと答えました。

その実を味わった天智天皇は「むべなるかな」と得心して、「斯くの如き靈果は例年貢進せよ」（このような靈妙な果物は毎年朝廷に献上せよ）と命じました。「むべ」（宜べ）は、「よろしい」「程良い」「その場にマッチしている」といった意味で、「宜」の字は今でも「適宜」「時宜」「便宜」「宜しい」など“convenient”の意味で使われます。「むべなり」は「なるほど」「もつともだ」といった意味です。

天智天皇の「むべなるかな」という言葉に因んで、その後この果実は「ムベ」と呼ばれるようになり、平安時代の法令集である「延喜式」には「近江の国からムベが献上されていた」と記録されています。

「ムベ」はアケビ科のツル状常緑性低木で、秋に鶏卵より少し大きめの赤紫色の実をつけます。実はキウイフルーツのようで、食感はプニプニとしてブドウに似ており、ほのかな甘みがあります。漢字では「野木瓜」とか「郁子」と書きますが、「郁子」の「郁」の字は「香気のかぐわしいさま」で「馥郁たる香」などと使われます。奇しくも国際平和ミュージアムの清水課長のお名前は「郁子さん」です。むべなるかな。

ミュージアム館長・名誉館長のステートメント

国際平和ミュージアムでは、折に触れ、館長／名誉館長が時事問題や歴史的問題について対社会的メッセージを発信してきました。一部を紹介すれば、「伊藤一長・長崎市長に対する銃撃テロに関する館長声明」（2007年4月20日）、「久間章生前防衛大臣の『原爆しようがない』発言についての館長声明」（2007年7月3日）、「名誉館長談話：初代館長・加藤周一さんが亡くなりました」（2008年12月7日）、「館長・名誉館長声明：イスラエル－ハマス紛争に国際世論で人道的歯止めを」（2009年1月12日）、「『核持込密約』問題についての声明」（2010年3月18日）、「朝鮮半島の南北衝突についての緊急声明」（2010年11月24日）、「メア米国国務省前日本部長のアメリカン大学での沖縄県民を侮辱する講義内容についての談話」（2011年3月11日）、「名古屋市長河村たかし市長の発言についての見解」（2012年2月21日）、「日中の友好関係の発展にむけての館長・名誉館長見解」（2012年9月21日）、「2013年2月12日の朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の核実験に対する国際平和ミュージアム館長・名誉館長緊急声明」（2013年2月18日）、「『集団的自衛権行使容認』をめぐる閣議決定について 国際平和ミュージアム館長・名誉館長声明」（2014年7月30日）、「第二次世界大戦終結70年にあたっての声明」（2015年6月30日）などです。

よく見ると、メッセージの性格には、「談話」「見解」「声明」の3種類があります。いずれも、館長や名誉館長が勝手に

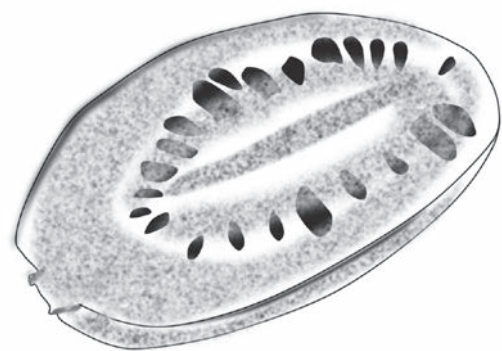
出すという性格のものではなく、大学の教学理念や運営方針と大綱において齟齬が生じないように、総長も事前に目を通す機会が作られます。

「談話」は、時の話題について館長や名誉館長がとりあえずどのような感懐を抱いているかを紹介するもので、その意味では「見解」や「声明」ほど重くはありませんが、メッセージの受け手が「そだねー」と感じるような性格のものです。

「見解」は、評価が分かれそうな問題について館長／副館長がどのように見ているかを事実関係を踏まえて示すもので、「声明」ほど重くはないにしても内容に対する責任の度合いは「談話」より重いでしょう。受け手が「さもありなん」と思ってくれることを念頭において起案し、合意形成を図ります。

「声明」は単に事実関係をなぞるだけでなく、時には立命館大学国際平和ミュージアムの館長・名誉館長なりの価値観を反映して「こうすべきだ」とか「こうすべきではない」とか「こうしてほしい」といったアピール性が含まれることもあります。そのためには受け手が「なるほどその通りだ」と納得するような内容であることが求められますので、日本国憲法や教育基本法や教学理念や立命館憲章の精神を踏まえて「むべなるかな」という説得性のあるメッセージに仕上げるのが必須で、総長を含めた日英両文の内容合意に1か月ぐらいかかったりします。

というわけで、今後とも必要に応じて声明や見解や談話を発信したいと思っていますので、みなさんが関心を抱き続けて頂くことを期待したいと思います。



ムベの実（安齋画）

平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築

兼清順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

本プロジェクトでは、2016年より戦争体験継承とその展示のあり方について実践的な調査研究を進めています。本年はその成果として、今後博物館が戦争体験に向き合う上で手がかりとなる展示を制作して発信するため、研究メンバーと学芸員を中心に展示プランの検討を行いました。

今後求められることとして本プロジェクトが特に強調するのは、展示が、「コミュニケーションの場」であること（文字中心の啓蒙型よりも体感型、来館者のアウトプットを重視するなど）と、戦争体験とその継承とは何か「考える場」であることです。短期間でこれら理念を展示に練り上げ、制作するのは困難な作業でしたが、多くの方々の協力を得て、形になりました。

展示は、8月6日をキーワードに現代における戦争体験継承の在り方の多様性（水平的な広がり）と、歴史の中での継承の多様性（垂直的な広がり）を考察する構成をとりました。はじめに「コミュニケーション」と「戦争体験と継承を考える」双方の要素を備えた『レプリカ交響曲《広島平和記念公園 8月6日》(2015)』の出品が決まり、この作品が現代における戦争体験継承の多様性を示すビジュアルインスタレーションであることから、これと対を成すように、歴史の中での戦争体験継承の多様性を見つめる、資料中心の展示として「8月6日のワンピース」を考案しました。調査過程でワンピースの来歴がこれまで伝えられていたことと違うこともわかりましたが、この事実も含め、コミュニケーションの場を開くことを目指し、来館者に考えてもらうデジタルコンテンツを制作しました。(秋季特別展「8月6日」については、本誌P13-14をご覧ください)

また、この展示をひとつのモデルとして検証するため、来館者調査、デジタルコンテンツの回答分析、展示評座談会を実施しました。

来館者調査では、想定以上に「音」が見学者に強い印象を与えていたことや、見学者の大半が展示物の内容は理解していたものの、展示物同士やセクション同士の関係性については全ての見学者が気付き、考えているわけではないことも明らかになりました。一方、展示評座談会では、今回の展示が継承のバトンがどのように渡されてきたのかを示し、今度は来館者に渡ししかけになって

いるとの評価や、モノと出来事が交錯した様相を展示で表現するためには、状況の詳細なプロセスを詰めることが有効になるといった指摘がなされました。

戦争の悲惨さを伝える、体験を語り継ぐことを前提にそのためのコンテンツを提供する展示ではなく、来館者が、なぜ語り継ぐのか（もしくは語り継がないのか）そこから考えることができる展示・開発に挑戦したこのプロジェクトの総括については今後発行の報告書をご覧くださいと思います。

*この研究は JSPS 科研費 16K12814 の助成を受けたものです。

2018年活動実績

第6回ワークショップ 2018年3月17日(土)

「戦争体験のない世代が伝える戦争の記憶～京都の空襲に関わる二つの事例報告～」

坂口満宏(京都女子大学文学部教授)、若林美玖(京都女子大学坂口ゼミ3回生)、黒田一馬(立命館大学映像学部4回生)

第7回ワークショップ 2018年5月18日(金)

「「声なき声」を聞き伝えるー沖縄戦のヒアリングの現場から」

西尾慧吾(沖縄戦遺骨収拾国吉勇応援会・学生共同代表)

第8回ワークショップ 2018年6月22日(金)

「継承の力学ー広島における「被爆体験」の遺産化とその影響」

根本雅也(衣笠研究機構プロジェクト研究員・国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー)

第9回ワークショップ 2018年7月29日(日)

『レプリカ交響曲《広島平和記念公園 8月6日》(2015)』

土屋大輔、根本雅也(衣笠研究機構プロジェクト研究員・国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー)

第10回ワークショップ 2018年11月17日(土)

「戦争体験『語り』の継承ー広島、長崎、沖縄、国立を事例としてー」

外池智(秋田大学教授)

第11回ワークショップ 2018年12月8日(土)

「くにたち原爆・戦争体験 伝承者講話」

沢村智恵子(くにたち原爆・戦争体験伝承者)

ラウンドテーブル(展示評座談会) 2018年12月15日(土)

コメンテーター:浜日出夫(慶應義塾大学)、松尾浩一郎(帝京大学)、青木深(東京女子大学)

モデレーター:根本雅也(衣笠研究機構プロジェクト研究員・国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー)

司会:兼清順子(国際平和ミュージアム)

平和教育研究

京都欧州人権セミナーを通じての人権問題の共同研究と国際ネットワーク

学術講演会 「欧州憲法アーキテクチャにおける州憲法裁判所の役割」

出口雅久

(平和教育研究センター運営委員 / 法学部教授)

2019年1月4日(金) 10:30から12:00まで立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館において欧州人権裁判所アンゲリカ・ヌスベルガー副長官(ケルン大学法学部教授・元ケルン大学副学長)による学術講演会:「欧州憲法アーキテクチャにおける州憲法裁判所の役割」が立命館大学比較司法制度研究会主催、立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センター、日本学術振興会、日本ケルン会などの後援で開催されました。お正月早々にも関わらず、学内外より30名を超える多くの皆様方にご参加頂くことができました。ドイツでは、戦後、各州にもそれぞれの州憲法裁判所が設立されており、各州憲法と連邦基本法、そして欧州人権条約などとの調整について大変興味深い議論が展開されました。講演後は、本学法科大学院・薬師寺公夫教授なども交えて大変有意義な学術交流をすることができました。今回の欧州人権裁判所アンゲリカ・ヌスベルガー副長官の招聘についてご協力いただいた本学研究部人文リサーチオフィスおよび本学国際平和ミュージアム関係者皆様方に心より御礼申し上げます。なお、アンゲリカ・ヌスベルガー副長官は、これよりさき2018年12月28日にも東京・明治大学法科大学院中山幸二教授(明治大学自動運転社会総合研究所所長)およびスタッフの方の献身的なご尽力により同じタイトルで学術講演会を開催し、ドイツ大使館 Dr.Klaus Vietze 公使をはじめ、各大学研究者、そして東京に就職している私のゼミOBの加島弁護士やNTT法務部の中森君にも参加していただき、20名を超える参加者を得て極めて有意義な学術交流を東西で開催することができました。とりわけ、日本ケルン・アルム二会の責任者もご担当されている中山幸二教授には、年末の大変お忙しい時期にご無理をお願いし、快く明治大学自動運転社会総合研究所の会議室を提供していただきましたことを、この場を借りて改めて感謝申し上げます。



アンゲリカ・ヌスベルガー欧州人権裁判所副長官によるカンファレンスホールで講演会



元立命館大学副総長・薬師寺公夫教授との質疑応答



アンゲリカ・ヌスベルガー欧州人権裁判所副長官と京都大学法学部毛利透教授と図書館前で



アンゲリカ・ヌスベルガー欧州人権裁判所副長官と前立命館大学副総長市川正人教授と懇談

三年目のメディア資料研究会

田中聡

(メディア・資料セクター長 / 文学部教授)

2016年度から始まった「メディア資料研究会」は、国際平和ミュージアムが所蔵する多様な資料の価値を再発見し、今後の研究や展示に活かすための試みであり、同年設置された平和教育研究センターの基盤となる研究プロジェクトとして位置づけられている。三年目を迎えた今年度の第1回（7月27日・通算第9回）は、BC級戦犯としてフィリピンの軍事法廷にて裁かれ、死刑判決を受けた横山静雄元中将の私文書群について、広島市立大学の永井均氏にご報告頂いた。当地のBC級戦犯に関する裁判記録など主な資料は、国会図書館やGHQ/SCAP文書、フィリピン公文書館等に一部が残されているが、その殆どが公的な記録であり、平和ミュージアムが所蔵する横山の獄中日記や収容所の写真、慰問者の名簿などのような私的な記録は希有であること、「ああ、モンテルパの夜はふけて」にも歌われたBC級戦犯自身のフィリピン人への視線や戦争観など、これまで解明が進んでいなかった点が横山の資料群からみえてくること等が詳しく紹介され、改めて当資料の貴重さが浮き彫りとなった。



第9回研究会 報告される永井氏

第2回（10月11日・通算第10回）は、平和教育センターのリサーチアシスタントを務める福井優氏が、1969年から70年までの間に刊行された雑誌『週刊アンボ』を取り上げ、主宰者である小田実が安保闘争で揺れる世情を見据えて生み出していった「人間の渦巻」（様々な立場の市民が相互に結び合っただけでなく、社会全体を巻き込んでゆく）に注目した。当時第一線で活躍していた作家やイラストレーターから一般市民までの多彩な人々が関わり合っただけでなく、こうしたユニークなメディアのなかに、市民運動のリアルな

実態が読み取れ、現在常設展示のリニューアルに取り掛かっている平和ミュージアムにとっても有益な報告であった。



第10回研究会 福井氏（左上）による『週刊アンボ』の解説

続く第3回（12月13日・通算第11回）には、本学大学院生の山口一樹氏が、『アンパンマン』の作者として知られるマンガ家やなせたかしの戦争体験に注目し、ほとんど触れられないことのない氏の戦争体験と、やはり著名なマンガ家水木しげるを対比して論じた。メディア資料室の閲覧コーナーには戦争を取り上げた東西の様々なマンガが並んでいるが、十分に利用されていない。今回の報告は、かわいらしい絵柄と皆が友達という暖かい物語のイメージが強いやなせたかし氏が、中国戦線での戦地体験や、早世した弟への「うしろめたさ」を抱えていたこと等、斬新な視点が示され、興味深かった。



第11回研究会 山口氏（中央）によるやなせたかし作品の解説

本研究会も10回を越え、若手研究者がこれまで展示でもほとんど取り上げられなかった資料に注目し、その価値を再発見するなど、新たな成果が出てきている。今後はさらに、戦後の平和運動や自衛隊関係の資料、音声・動画データ、写真・絵画などビジュアル資料等も対象に加え、外部の研究者とのネットワークも拡大し、平和ミュージアムの蓄積してきた資料の価値を内外に広く発信して行きたい。研究会への参加者の増加も急務である。皆様のご協力を心よりお願いいたします。

「原発事故による被害・影響の多様性と語りえぬ受苦」

金森絵里

(国際平和ミュージアム運営委員 / 経営学部教授)

今回の「運営委員リレー連載」では、第22回原子力市民委員会の導入として細川弘明氏（京都精華大学人文学部教授、原子力市民委員会事務局長、東電福島原発事故部会コーディネーター兼任）が解題された内容を紹介し、細川氏のテーマは上記タイトルにある「原発事故による被害・影響の多様性と語りえぬ受苦」です。

2018年12月2日（日）、東京都文京区にて、第22回原子力市民委員会「原発事故被災における『語られぬもの』を可視化する～心身ストレス、ジェンダー、優生思想と分断～」が開催されました。原子力市民委員会とは、脱原発社会の構築のための情報収集、分析および政策提言を行うとともに、幅広い意見を持つ人々による議論の「場」を提供することを目的として2013年に設立された市民シンクタンクです。第22回原子力市民委員会は、傍聴者数やYouTubeの視聴回数もいつもより多く、SNS等でも話題になったそうです。

原発事故被害の特徴－被害の多面性、長期性、重大性、広範性

原発事故の直接的被害として、放射能による被害が挙げられます。初期被ばくに関して、本来、原発事故が発生した際には、SPEEDI（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）により、放射性物質の拡散シミュレーションが国民に開示されるとともに、屋内待避指示や避難指示が出されるはずでした。しかし、SPEEDIは地震発生から2時間後には稼働を開始し、政府や福島県庁にもデータが提供されていたにもかかわらず、そのデータが公表されたのは3月23日になってからでした。被災地では、水やガソリンの補給のために子どもや赤ん坊も含め多くの人が長時間屋外に並んでいましたが、しかるべき対処と情報共有がなされれば初期の無用な被ばくを避けられたはずだと指摘されています。また、津波によりがれきの下敷きになった人々を、その地域が放射能に汚染されていたために、救助することができなかったことも放射



原子力市民委員会 HP より

能による被害に含まれるという見方もあります。

放射能による直接的被害ではありませんが、ライフスタイルや生活プランの変化による間接的影響も見過ごしてはならないとされています。放射能についての認識の違いによる孤立と分断、別居生活などのストレス、外遊びや運動ができないことによるストレス、体力低下などの影響は大変大きいと見られています。とりわけ生業と故郷を失ったこと、また将来の生活の見通しが立てられないことに加えて、子どもや母親が避難することにともない家族の分断・別居が頻繁に起こったことによる精神的打撃は甚大でした。長年住み慣れた居住地が放射性物質に汚染されてしまったため、生活を支えていた数多くのかけがえのないものが一挙に失われ、多くの原発事故関連死および関連自殺をもたらしました。岩手県、宮城県に比べ、福島県の震災関連死（その大半は原発事故関連死）が突出して多いことが調査により明らかにされています。福島県では関連死者数が地震や津波による直接死の1,607人を上回っています。また震災関連自殺者数が、岩手・宮城両県では減少しているのに対し、福島県では年々増加しました。

細川氏は、被害者支援、救済、復興施策において、多面性、長期性、重大性、広範性という特徴が十分に考慮されてきたかという重要な問題提起をされています。

二重の選別（二重の排除）

2017年4月4日、今村雅弘復興大臣（当時）は記者会見で、福島原発事故による「自主避難者」に対し、帰還できないのは「本人の責任」であるとし、「そういう一応の線引きをして、ルールに則って、これまでそうしてきたわけですから。その経過はわかってもらわなければならない」としたうえで、それが受け入れられないなら「裁判でもなんでもやればよい」と述べました。これは、同年3月末に、福島県内からの「自主避難者」に対してなされて

いた住宅費の補助が打ち切られたことに対する記者会見での質疑の中での発言でした。住宅費の補助打ち切りは、区域外避難者における生活の困窮を招くことになりましたが、そのことに対して、そうなのは「本人の責任」だとされたのです。この発言は、政府が、一方的な「線引き」に基づいて「被災者」の選別を行い、この選別に基づいて原発事故対応を実施した姿勢の象徴であるとみられています。

上記は区域「外」避難者への姿勢でしたが、避難指示区域「内」からの避難者への対応にも問題があるとされています。たとえば、富岡町などでは2017年4月1日に避難指示が解除されました。解除対象エリアでは、帰還者と帰還しない避難者との分断が進み、帰還しない避難者は「自主避難者」と捉えられました。細川氏は、被災者が、誰を「被災者」とするかという選別と、「被災者」のうちのどういう意見を聞くかという選別の「二重の選別」あるいは「二重の排除」を受けていると指摘しています。換言すれば、政府の容認する被災者の行動に対しては予算を使い、そうでない行動に対しては容赦なく切り捨てるということが行われているのです。

こうした現状に対し、原発事故後、抛って立つ基盤が皆無であったかといえば、そうでもありません。「子ども・被災者支援法」はその貴重な例外だとされています。たとえば、まず「当事者」の定義として、子ども・被災者支援法では「一定基準」以上の汚染地域を支援対象地域として想定していました。原発サイトからの距離ではなく、汚染度合いによって被災地や「当事者」を定義つけたのです。そして、「一定基準」も含め、具体化の過程で被災者からの意見聴取を行うよう規定していました。また、「当事者」の中にも多様な意見が存在することをふまえて、支援法は、「被災者の選択を国が支援する」という方向性を打ち出しています。すなわち、当事者が行った選択に対して、排除や順位づけを行わず、いかなる選択も尊重するという方向性です。細川氏は、長期化する原発事故対応の中で、こうした政策への転換が求められているとしています。

被ばくのタブー化

現在、「被ばくのタブー化」がみられるといえます。近隣でも知り合いの間でも、さらには家族の中でも被ばくについては話題にできない雰囲気広がっていることを指します。たとえば、「10マイクロシーベルト/hを超さなければ、まったく健康に影響を及ぼしません」という大学教授の言葉や、地上1メートル（身長の高い子どもは地上1メートル未満における線量の影響を受けるにも

かかわらず）におけるガンマ線の空間線量率によって被ばく線量を推定し「線量は十分低い」とする判断など、被ばくの影響を過小化する傾向が「被ばくのタブー化」の一例です。また、「福島」の事故の放射能からの健康リスクは無視できるけれども、何か起こるかもしれないという過度の不安は放射線そのものよりもずっと健康に悪い」とか、「避難するリスクの方が大きい」といった言い方も「被ばくのタブー化」の一類型とされます。さらに、被ばく問題に触れることは「差別につながる」という形も同様です。

被ばくのタブー化や過小評価がもたらす負の影響として重大なのは、本来行われるべき調査が行われず、議論の前提となる実態把握を欠くことです。つまり、「被ばくのタブー化」によって、原発事故の被害を争点化させず、話題にあがることを回避させ、ひいては原発事故自体を意識から遠ざけ、原発事故の被害など「なかったこと」にしてしまう恐れがあります。それは、被ばくの健康影響を心配する人に心理的圧力をかけ、不安を抑圧することにつながっています。

こうした現状を見ると、日本学術会議が1958年4月、第26回の総会において、「放射能は人間の遺伝に対してはどんなに照射量が少なくてもそれに応じただけ影響がある」とし、「許容量は『その線まで許せる』という観方をすべきではない。そのような科学的な線は存在しない」ことを確認したという事実が、今あらためて注目されていると細川氏は指摘しています。

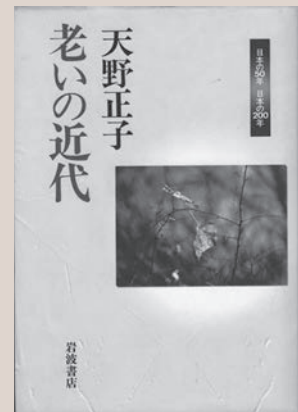


細川弘明氏・京都精華大学 HP より

『老いの近代』

天野正子 著

岩波書店 1999年



このごろ留学生の大学院指導を引き受けることが多くなった。筆者の専門が社会学ということもあり、院生のテーマは幅広いのであるが、その中でも近年増加しているのが「高齢社会」に関する研究である。たとえば、現在指導中の北京からの留学生のテーマは「前期高齢者のボランティア活動の参加要因」であるし、もう一人、筆者が副指導をしている中国からの留学生は「日本のシルバー人材センター」について修士論文を書いている。我が国の「超高齢社会」の現象は、日本に住む私たちが思う以上に、アジア近隣諸国の若者には興味深いテーマのようである。

さて、今回紹介する本は、筆者の大学院授業で留学生にも講義しているもので、タイトルは『老いの近代』である。歴史社会学の視点から「老い」の見方や考え方を相対化して捉えた社会学者による論考集であり、日本の「老い」が時代によってどう移り変わり、それを社会がどう捉えてきたかを理解する上ではきわめて示唆に富む内容だ。著者は明治以降の近代化の過程で、「老い」へのまなざしがどのように変容し定着してきたのかを様々な資料から探る。ここでいう「まなざし」とは、老いに関する、ある時代の社会に共通した慣用的な考え方（観念）である。

著者の基本的な問題関心の一つは、「なぜ、現代（近代以降）は、老いや死に対して怯えるようになったか」というところにある。近代文明は、青年と壮年の視点を中心に据え、対照的に老人と病人をみえないところに追いやり、老いや死を老人ホームや病院、葬儀産業の手にゆだねてきた。その結果、近代人は老いと死に怯えるようになった、と著者は述べる。これに対して、近世においては、老いの中に、再生や若さに通じる生命の連鎖がみられ、そこには、多くの人々が老いの中に衰弱と恐怖のみを見る今とは対照的な世界があったという。

では、なぜ近世の人々が、老いの中に再生や若さに通じる生命の循環をみることができたのか。その疑問を解く一つの手がかりが、「農的なもの」である。キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間の対話』に依拠しながら、著者は次のように述べる。「土を耕し、種を播いて成長を見守り、収穫をして、枯れ朽ちてい

くものをまた土にもどす。もちろん自然災害による凶作など、自然との闘いは厳しかった。しかし、そこには少なくとも、枯れ朽ちた植物をいとおしむ心性、世阿弥の能楽論にある『花の萎れたらんこそおもしろけれ』と結びつく心境が残されていた。なによりもそこでは、老いと生、死と生がしっかり結び合い、互いに交信しあう関係を肉眼で確かめることが可能であった。再生と生命の循環を信ずる心性は、死や、それにつながる老いを忌避する心性からはほど遠いものだったといつてよい」と。

つまり、近世では、老年期は次の生への準備期間として位置づけられ、死は恐怖のみの対象ではなかったのである。近代化の過程で私たちは「農的なもの」を喪失してしまった。それがために、必要以上に老いることへの恐怖心を抱いたり、老いへのネガティブなイメージができあがったのではないかと著者はいう。近代が失った老いを蔑視することもなく聖化することもなく、あるがままに見つめる「まなざし」は大切である。それを歴史の中で検証する本書は、超高齢社会に入った日本社会が、老いとどう向き合うかの道筋を探る上でも示唆に富んでいる。

さて、これを読んだ留学生は現代の日本の超高齢社会をどう捉えたのだろうか？ 講義の中で学生たちとこれを一読すると、現在のわれわれが共有する「老い」の観念はけっして普遍的なものではなく、時代や文化によって大きく異なっていることをあらためて理解するようである。とりわけ中国からの留学生は、現代中国の急激な経済成長と高齢化が同時に進行する中国固有の社会構造の特徴をあらためて認識する。このようなアジアの留学生たちにとって、高齢化した日本社会は模範とすべきグッド・プラクティスなのだろうか？ それとも「日本のようになってはいけぬ」という反面教師像なのか？ まもなく指導教員として留学生の修士論文を査読する立場としても、彼らの「超高齢社会」日本への批評が楽しみでもあり、ちょっと不安でもある。

前田信彦

(国際平和ミュージアム運営委員 / 産業社会学部教授)

第 25 回日本平和博物館会議に参加して

兼清 順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

2018年11月8日、9日に第25回日本平和博物館会議が開催されました。日本の平和博物館10館によって構成されるこの会議は、毎年秋に加盟館が集って協議や情報交換を行っています。また、2015年には加盟館と日本平和博物館会議の活動をパネルで紹介する戦後70年の共同企画も開催しました。

本年の会議は、ピースおおさかが会場となりました。1日目は「戦争体験の継承に新技術を導入すること」「若い世代を対象とした取り組みについて」などの協議と、山地英彦館長の案内によるピースおおさかの館内見学、2日目は大阪城公園の戦跡ウォークや大阪城天守閣見学などのフィールドワークが行われました。

近年の協議では、「戦争体験の継承」、特に体験の無い世代が戦争体験を語り伝える取り組みについての議論が盛んでした。戦争体験を伝えていくことは、引き続き各館にとって中心的課題ですが、本年は、戦争体験を伝えるための展示技法や情報発信などのあり方に論点の中心が移った印象を受けました。

この背景には、体験の無い世代が、証言を伝える「説明員」や「伝承者」のあり方に一定の成果が見え定着してきたことと、日常生活の中にデジタル技術が浸透し、戦争体験を伝える上でも新技術を取り入れることを求める声が起こることがあるでしょう。極端な例ですが、アメリカでは、ホロコースト生存者のホログラムを作り、彼らの死後も対話できるAIプログラム

を開発するという試みも行われています。

今回の議論の中では、最新技術は導入当初に目を引いても数年で古くなる、メンテナンスの手間や予算が膨大である、情報更新が難しいといった運営上の課題、新技術の導入よりも展示内容を伝える手段として最適な方法を吟味することの方を重視すべきなど各館の経験や意見の交換が行われました。その後の情報交換会でも、この点は話題に上り、長崎原爆資料館の中村館長が戦争体験を伝える展示において、見るものの想像力を喚起することの重要性を話されたことが、心に残りました。

また、若い世代や親子、児童向けのプログラムについても意見交換が行われ、企業と連携した夏休みのワークショップ、平和をテーマにしたラップの歌詞募集、大学生を対象にした海外でのフィールドワークツアー、中高生を対象とした国内の戦跡めぐりツアーなど、各館が若い世代を対象に新しいとりくみを進めていることが共有されました。こうした取り組みが今後、若い世代が過去の戦争を他人事ではなく自分との関わりを持って受け止めていく契機に繋がっていくことが望まれます。

2日目のフィールドワークでは、ピースおおさかの専門員田中優生氏の案内で大阪城公園内をめぐりました。大阪城天守閣には年間250万人以上の観光客が訪れるなど、大阪城公園は人気の観光スポットですが、かつてこの場所は大阪陸軍造兵廠（陸軍の火砲や弾薬などを作る工場）でした。また、現在はレストランやカフェなどが入るミライザ大阪城は、1931年に陸軍第四師団司令部庁舎として作られた建物です。現在も公園内に残る「陸軍用地」の杭や石垣に残る空襲の跡などを明朗に紹介する案内はわかりやすく、現在の華やかな賑わいと戦争の歴史の対比を浮かび上がらせるものでした。



展示案内するピースおおさか山地英彦館長



石垣に残る空襲の跡を見学する参加者

世界報道写真展 2018

—WORLD PRESS PHOTO 18—

大分会場（立命館アジア太平洋大学）

会 期：2018年9月16日（日）～10月3日（水）

会 場：A棟コンベンションホール

参観者：1,501名

京都会場（立命館大学衣笠キャンパス）

会 期：2018年10月6日（土）～10月28日（日）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階中野記念ホール

参観者：6,911名

滋賀会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

会 期：2018年10月30日（火）～11月11日（日）

会 場：エポック立命 21 エポックホール

参観者：968名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、
世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会
公益社団法人日本写真家協会、全日本写真連盟、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS 京都、滋賀県、大津市、草津市、滋賀県教育委員会、大津市教育委員会、草津市教育委員会、NHK 大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社

協 賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社
ゲッティイメージズジャパン株式会社

「世界報道写真展」は今年で61回目を迎えました。今回は125の国と地域から4,548人の写真家により73,044点の応募がありました。会場には、「現代社会の問題」、「環境」、「一般ニュース」、「長期取材」、「自然」、「人々」、「スポーツ」、「スポットニュース」の部の8部門において、22カ国42人の受賞作品が並びました。

毎年来場いただくリピーターの方をはじめ、一般の方や学生など今回初めて来場いただいた方も多く、幅広い層の方々から大きな反響がありました。来場者には、一枚一枚に向き合うことで、世界でいま何が起きているのかを受け止め、「平和」について考えていただく機会となりました。

学外における広報としては、地域交流センターや、駅などの人目にふれることの多い場所へのチラシや招待券配布を行いました。学内広報においては、図書館のデジタルサイネージなどの視覚的効果を狙った従来どおりの広報企画だけでなく、今年はTwitterなどSNSを使った広報にも力を入れました。立看板と連動したデザインのフラッグも昨年と同様にキャンパス内に取り付け、manaba+R（学内者向けシステム）にも掲載したことで学内の学生にも広く知っていただくことが出来ました。学内の他部課との連携やミュージアム運営委員および先生方からの学生への広報協力など、学内外の多くの協力を得たことも来館につながりました。



京都会場



滋賀会場

来館者 アンケートより

様々な問題が今の世界にあふれているという事実を知ることができた。（10代 学生 京都市）

色々と考えさせられました。平和がどんなに難しいことなのか…。（40代 主婦 京都市）

テレビがあまり取り上げない現実の姿を目の当たりにすることができました。環境や政治に留まらず多岐にわたる分野の写真が一堂に会していてよかったです。（20代 学生 京都市）

せんそうがおわったから世界がへいわになるとはかぎらないと思った。（10歳未満 小学生 大阪府）

日本の中でも、いろいろなことが起こっています。沖縄、福島、貧困、虐待…国内の写真展・映像祭もしてほしいです。（60代 福祉関係者 滋賀県）

事業報告 | 特別展

世界で起こっていることを報道（新聞やテレビなど）で知っているような気がしているが、実は知らないこともたくさんある。また、知っていることも一枚の写真に切り取られると、生々しかったり、衝撃的だったりしてとても力がある。その力に、なんというか・・・圧倒されてしまいます。（50代 会社員 京都市）

その土地へ赴き、その土地の人びとと話をし、その上で撮られた写真たち。目を見張る美しさも、目を背けたい悲惨も、全てが現実であるのだと強く知らされました。ぜひ来年もお願い致します。（10代 学生 京都市）

世界の中で起こっているニュースがどれだけ知らされているのか疑問に感じます。メディアや報道がもっと真実を知らせてほしい。教えてほしい。と切実に感じました。（60代 主婦 京都市）

写真から、その人の怒り悲しみが鮮明に伝わってきて、写真に写っている人と目が合うと、自分自身を見られているようで、はっとした。自分からは遠い所で起きている事だと傍観していて良いのか、このまま今まで通りの生活でよいのか、今後の生き方を考えさせられました。私はこの写真展で見た人々の目を一生忘れられないと思います。（20代 学生 大阪府）

静止画が与える印象は想像以上だった。普段我々が動画に慣れ過ぎている面もあるかもしれないが、写真の方が、生々しさが増しているような気さえた。（20代 大学生 京都市）

■フォトジャーナリスト安田菜津紀講演会

「写真で伝える仕事

ー世界の子どもたちと向き合っー

日 時：2018年10月19日（金）18：00～19：00

場 所：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

講 師：安田菜津紀氏

参加者：85名

関連企画として、フォトジャーナリスト安田菜津紀氏をお招きし、講演会を開催しました。

シリアや陸前高田等の写真スライドを紹介しながら、その写真の背景や現場での出来事、伝えたい思いを語っていただきました。またフォトジャーナリストとして果たす役割についてや、誰にでも「役割分担」があるというお話をされ、参加者一人ひとりも自分に何が出来るか考えるきっかけとなりました。

た。参加者からは「“知る”というわずかながらの第一歩を踏ませていただいた今、次は行動する番だと思っております。」「学ばせて頂いた言葉、経験、私も伝えていきたいなと思います。」といった感想が寄せられました。



■ゴスペルコンサート

「Make the world peace ー平和への音色ー

日 時：2018年10月27日（土）14：00～14：45

場 所：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

参加者：45名

昨年好評だったジャズピアノコンサートに続く世界報道写真展音楽イベントの第二弾として、当館学生スタッフである立命館大学生も所属する同志社大学音楽ボランティア・ゴスペルサークル「New Songs」（インターサークル）が、歌を通し平和を発信したいという学生達の演奏を中心に曲にこめられた思いや選曲の理由を紹介し、歌声を披露しました。本展が伝える世界の現状と平和の意味について音楽を通して考えていただくとともに、学生の活躍する場を提供することで、他大学の学生にも本館への関心を高めてもらう機会となりました。

会場には45名の一般の方や学生などの参加があり「スピー

チされた方、歌われていた方々のまっすぐな思いが伝わってきました」「歌で平和を発信できるというのもいいですね」「堅苦しくない雰囲気ですべて『平和』について気軽に考えることができました」といった感想をいただきました。



「8月6日」

平和博物館における戦争体験継承のための展示
モデル構築プロジェクト成果展示

会 期：2018 年 11 月 6 日（火）～12 月 16 日（日）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階中野記念ホール

参観者：7,890 名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社

助 成：日本学術振興会 科学研究費助成事業 16K12814

戦後 73 年が経ち戦争体験者が減少する中、博物館はどのように戦争体験にアプローチすることができるのでしょうか。本展では、“8月6日”を手がかりに戦争体験の継承とは何か問いかけるを試みました。展示は大きく 3 つの要素で構成されました。

ひとつ目は「レプリカ交響曲《広島平和記念公園 8月6日》(2015)」です。これは、2015 年 8 月 6 日、戦後 70 年目の広島平和記念公園の 1 日を 17 地点で撮影し、それぞれの映像を 17 台のモニターに映し出すインスタレーション作品です。そこに浮かび上がる情景から戦争体験継承の多様性、多層性を表現し



ました。

ふたつ目の「8月6日のワンピース」は、1945 年 8 月 6 日、勤労働員中に被爆し、12 日に亡くなった木村愛子さんのものとして保管されていたワンピースを中心にした展示です。このワンピースは愛子さんが亡くなった後、家族、追悼施設を経て当館に引き継がれました。遺されたワンピースを手にした人々、目にした人々は何を共有してきたのでしょうか。ワンピースが辿った来歴を通して「継承」とは何かを問いかけました。

最後に、来館者が戦争体験を「知る」ことより「問いかけを受けとめる」ことを目指し、展示で感じたことを改めて考える場を設けました。若い世代により興味関心を持ってもらうため、タブレット端末で回答するアンケートを採用し、寄せられた回答を会場の壁面に投影しました。それにより、自分の考えをアウトプットすると同時に他者の考えを共有する場となりました。



見学者の感想 アンケートより

レプリカ交響曲では、平和記念公園に来られる方々の思いや願いをモニターからリアルに感じました。遺族の方だけでなく、世界の色々な国から来られており、世界平和の大切さを伝える大切な場所である事を再認識しました。「8月6日」を客観的に見つめる事で、新たに見えてくるものがあると感じました。子どもたちも学びの多い日になったと思います。ありがとうございます。(20代 教員)

今まで自分が見てきた戦争に関する展示とは大きく違う点が多くみられた展示でした。また、今まで見たことのない資料も多くありました。「戦争」というものから感じるありきたりの感情ではなく、今回は自分の中で新しい感情が生まれた気がします。戦争体験者がどんどんおられなくなる現在において、私達のような若い世代が戦争の実態を知り、伝えることがどれだけ大切かを知ることができました。(20代 大学生)

■関連企画ワークショップ

「戦争体験『語り』の継承ー広島、長崎、沖縄、
国立を事例としてー」

日 時：2018 年 11 月 17 日（土）15：00～17：00

会 場：国際平和ミュージアム 2 階会議室

講 師：外池智氏（秋田大学教授）

参加者：26 名

継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の教材や授業実践の調査・分析が専門の外池氏に、教育学の立場から戦争体験の語りの継承についてお話しいただきました。実父の人生を通して戦争体験に向き合うようになったという自身のきっかけに始まり、体験者がいなくなる中でそれを残すための取り組みには、モノによる継承とヒトによる継承があることが提示されました。今回は、ヒトが体験者の「語り」そのものを継承する「伝承者」について、広島、長崎、沖縄、国立の取り組みを例に、各プロジェクトの設立経緯と養成課程の特徴、内容構成論にもとづく分析結果の解説がされました。

ー参加者の感想ー

- ・個々の場所で行われている活動を比較検討するという試みは体験者が減少しているという中でとても大事な事であると思いました。今回は代表的な伝承の例である広島・長崎・沖縄そして国立のやり方を例として学問的見地から検討しましたが、これは地域での小さな戦争体験を受け継ぐ



外池智氏

事に大きな糧として利用できるとも感じました。ただ資料を残すのみでは歴史に埋まってしまう。“体験”として語り継いでいくことにより教訓として残るのではないのでしょうか。伝承者は語り部達が通った葛藤を追体験しながら伝承者として確立していくでしょう。決して楽な道ではありませんが、未来では伝承者の存在があたり前となる事を願って止みません。

(10代 大学生)

- ・戦争体験の「記録」「記憶」をどうやって次の世代に継承するのか？今日話を聞いて戦争体験「語り」というプログラムがあることがわかりました。広島・長崎・沖縄・国立を事例として説明していただき、4つのプログラムを介してやっぱり今継承者として活動していく人が少ないと感じ、戦争の恐れを忘れないように、こういうプログラムをもっと増やしてほしいと思います。

(20代 大学生)

■関連企画ワークショップ

「くにたち原爆・戦争体験 伝承者講話」

日 時：2018 年 12 月 8 日（土）14：00～15：00

会 場：国際平和ミュージアム 2 階会議室

講 師：沢村智恵子氏（くにたち原爆・戦争体験伝承者）

参加者：25 名

「くにたち原爆・戦争体験伝承者」である沢村氏を招き、広島で被爆した平田忠道さんの体験の伝承講話を行いました。初めに、原爆の威力と投下の経緯を京都が原爆投下候補地であったことに触れつつ説明されました。続いて当時 15 歳だった平田さんと家族の様子、8 月 6 日に勤労動員先から市内へ戻り、自宅や救護所で家族を捜し求めた平田さんの体験を、被爆者が描いた原爆の絵や地図のスライドを交えて語られました。伝承者になることで平田さんからバトンを渡され、そして被爆者である自身の家族からもバトンを渡されていたことに気が付いたという、沢村さんの言葉が印象的でした。

ー参加者の感想ー

- ・戦争体験伝承の可能性を強く感じた。戦争未経験者が戦争



沢村智恵子氏

体験を聞き・学び、そして自分の体験をまじえて自分の言葉として語る。「こんな方法があるのだな」と勉強になった。次の世代を生きるものとして、平和について考え続けたい。

(20代 大学生)

- ・体験していない人から聞く“戦争体験”にどのような印象を持つか自分自身でも不明でしたが、胸にせまるお話でした。真摯に受けとめ受け継ぐ人がいれば、誰が伝えても本質は変わることなく、伝承されるのかとその可能性を感じました。

(40代 会社員)

ミニ企画展示

第119回

「第12回立命館附属校平和教育実践展示」

会期：2018年10月7日（日）～12月16日（日）
主催：立命館宇治中学校・高等学校、立命館中学校・高等学校、立命館小学校、立命館守山中学校・高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示の詳細は、次項「多様な立命館附属校の平和教育」をご覧ください。

第120回

「わたしたちも撮りたい！ ～ネパールのひとびとがみる生活文化～」

会期：2019年1月17日（木）～1月31日（木）
主催：鈴木岳海（立命館大学映像学部教授）
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

2015年4月25日に発生したネパール大地震は、8,959名^{*}が亡くなり、22,302名^{*}が負傷する大災害でした。60万以上の家屋が全壊するなど建物被害も多くありました^{*}。震災から約4年が経過し、現地では徐々に復興が進んでいます。

本展では、首都カトマンズや古都パタンなどが位置する、ネパールの中央部カトマンズ盆地に住むネパール族の生活文化に

焦点を当てた写真50点を展示しました。主催者の本学映像学部鈴木岳海教授はネパールの祭や儀礼などを研究しており、調査の中でネパール族の方々に出会ったそうです。

写真の半数はパタン出身の写真家アムリット・ヴァジュラチャリヤさんによるもので、もう半数はHiranya Day Care Center (HDCC) に集う60～80代の方々が撮影したものです。ヴァジュラチャリヤさんは10年以上に渡って撮り続けたパタンの年中行事や宗教儀礼などを、HDCCのみなさんはこれまであまり手にしたことのないカメラを使って身の回りの人や物などをそれぞれの視点で捕らえました。

震災による被害を経験したネパールの人々が、平穏な日常風景や日々の暮らしを大切にしている様子が写しだされていました。

※ユニセフ「ネパール現地報告会」（2016年8月22日）
[<https://www.unicef.or.jp/event/report/20160822.html>]
（最終検索日：2019年2月6日）



多様な立命館附属校の平和教育 ～2030年代を主体的に生きる子どもたちへ～

岸田康子

（国際平和ミュージアム運営委員 / 一貫教育部副部長）

立命館では、附属高校のうち3校がスーパーグローバルハイスクール（SGH）、3校がスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、1校がユネスコスクールの指定を受けており、国際的な活躍を目指す生徒が育つなかで、平和について主体的に考え、行動することを重要課題としています。すべての附属中学校において全員海外研修を実施し、小学校においても、国際交流をはじめ高学年希望児童の2ヶ月留学などが可能となっています。大学生となった卒業生が小学生のSDGsについての英語発表のサポートをするなど、継続的な教育活動を通して、国際意識の涵養のなかに「平和」の観点を重点としておき、積極的に平和教育実践を展開してきました。

2018年度は、10月7日から計55日間、「第12回立命館附属校平和教育実践展示」を開催しました。期間中の国際平和ミュージアム来場者は17,397名。そのなかで、本展示を見学し、アンケートに答えてくださった方々の声を一部、紹介させていただきます。

「戦争に関するリアルな感じがとても伝わってきた」「自分たちで取材し、その上で文章をまとめてあり、とてもよかった」「今の中学生が『平和：平和でない』の比率を表すとき、『平和でない』のパーセンテージのほうが高いことをとても悲

しく感じた。実際、平和でないと思うけれど……」「私たちが普段口にする“平和”の軽々しさを思い知らされた」「鮮やかな色彩でのびのびと描かれた作品から、子どもたちの平和に対する前向きな気持ちが伝わってきた」「子どもたちの個性溢れる展示はとても印象に残るものばかりで、平和に対する純粋な思いに感銘を受けた」といった感想、そして「来館者はもとより外部への発表も希望したい」「一貫校らしい面白い取り組みだと思った。もっと多くの人に見てほしい」「各校出身の現役大学生が案内したらどうでしょう」といった今後につながる提案までいただいたことに心より感謝申し上げます。

立命館宇治中学校・高等学校

会期：2018年10月7日（日）～10月19日（金）

テーマ：立命館宇治の平和教育

中学校1年生は学園祭において、31,200羽の折り鶴で「ハトモザイクアート」を完成しました。中学校3年生は「原爆」「戦争」に限定せず「自分が平和ではない」と感じたことについて調べ、その解決方法を考え、「平和新聞」にまとめました。

また、中高生の希望者が「第17回東アジア青少年歴史体験キャンプ（2018年度は中国・長春で開催）」に参加し、その交流と学びをポスターにまとめました。高校2・3年生の生徒委員会が社会科教員といっしょに継続して取り組んでいる「憲法平和集会」を今年度も開催し、ノーベル平和賞を受賞した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）唯一日本出身の国際運営委員を務める川崎 哲^{あきら}氏、被爆者の花垣ルミ氏をゲストにお招きし、クラス討議も行いました。



東アジア青少年歴史体験キャンプに参加

立命館中学校・高等学校

会期：2018年10月21日（日）～11月2日（金）

テーマ：立命館中学校の平和教育

立命館中学校では1989年から沖縄平和研修を実施しています。中学校2年生はその事前学習として沖縄の歴史・文化・自然など、具体的には食べ物・気候・家屋・琉球王国の宝物・長寿の秘訣といったテーマで調べ学習をレポートにまとめました。中学校1年生は「平和のイメージ」「平和でないイメージ」「地球の現状のイメージ」を美術の授業で抽象作品として表現しました。直線的で赤や黒が用いられた「平和でない」作品と比較すると、曲線や丸がモチーフとして多用され、パステル調の色彩中心の「平和のイメージ」の作品群に対しては、見学者から「癒された」との感想が寄せられました。沖縄平和研修を終えた3年生を中心に中学校美術部が制作した「無」という作品も展示しました。

また、2年がかりで、中学校文化委員会が中心となり、「あなたの思う平和と平和への願い」をテーマとして中学生全員のコメントを好きな色の折り紙に書いたものをもとに「平和の地球儀」を完成しました。



中学美術部制作絵画「無」、平和の地球儀

立命館小学校

会期：2018年11月6日（火）～11月17日（土）

テーマ：私の中の平和

小学校5年生は教科横断型の「Peace Week」を広島宿泊体験学習の事前学習として実施し、6月に実際に宿泊体験学習に参加しました。その学びのまとめとして、5年生全員は平和ポスターとして「私にとっての平和とは何か」を考えて1枚の絵に表現しました。「食べる喜び」「お風呂～楽しい時間～」「趣味ができる」「あたりまえの大切さ」「日常＝平和」「命をつなぐ」「光の『和』」「『生きる』は奇跡」「一緒に生きる」「記憶をつなぐ」「笑顔」「家族」といった表現が、八つ切り画用紙にちりばめられた110枚の作品を展示しました。

広島では、被爆者のお話を聞き、平和記念資料館を見学し、折り鶴を捧げました。



広島に届ける折り鶴を創る小学生たち

立命館守山中学校・高等学校

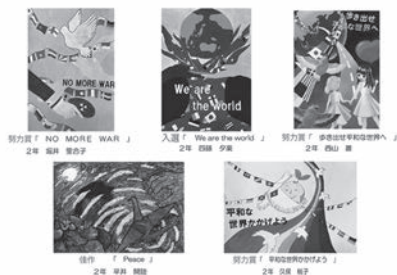
会期：2018年11月20日（火）～12月2日（日）

テーマ：立命館守山中学校・高等学校の平和教育、国際理解教育

「君が世界の当事者となる」をコンセプトに立命館守山の教育活動は展開されています。言語の壁を越えた芸術を通じての平和のメッセージとして、自分自身の「生」「平和」「社会」をテーマに、中学校2年生は「世界平和祈念ポスター」に取り組み、その入賞作品を含め、ポスターを展示しました。また「長崎・APU 平和研修」での学びを「平和新聞」「未来新聞」「恐ろしい閃光新聞」などと名づけてまとめました。また、ユネスコ委員会を中心としたパキスタンの女子校との国際交流では、国際紛争・環境問題・人口問題などについての対話を通じて「共同壁画」として表現しました。「小さな女の子が変える社会」とのタイトルのポスターは「女性が広い選択肢を持つ」と結論付けました。

第10期生にあたる中学校3年生は、1年生で新聞投稿（4名掲載）、2年生で33,000羽の折り鶴レリーフに取り組み、3年生で「世界報道写真展～記録された瞬間 記憶される永遠～」を見学し、新聞1面のコラム風にまとめました。

平成30年度世界平和祈念ポスター入選



世界平和祈念ポスター展に中学生5名の作品が入選

立命館慶祥中学校・高等学校

会期：2018年12月5日（水）～12月16日（日）

テーマ：世界を見つめる慶祥

「世界に通用する18歳」をコンセプトに立命館慶祥の教育活動は展開されています。2017年度から高校2年生が海外研修でポツワナを訪れています。ポツワナ政府から自然観光大使に任命されている立命館慶祥生は、帰国後に道内各地で報告会を行なっています。

中学校2年生の美術では「バルサタワー」制作に取り組みました。中学校3年生では国際関係の中にある「対立と合意」をテーマに、立命館大学国際関係学部 君島東彦先生、北海道大学大沼 進先生の講義やOGの講話を聴き、「ミニ国連」を実施しました。高校からの入学生は美術で、『『日本』の良さを他者に伝えるポスター』制作に取り組みました。

高校のSGHでは「国際社会講座」で「アイヌ文化」について学習しています。2018年12月に東京で行われた「全国高校生フォーラム SGH 課題研究発表会」で、「アイヌの伝統を知る～教育によるアイヌ文化の伝承活動」をテーマに提案を行い、文部科学大臣賞を受賞、全国1位となりました。



SGH全国高校生フォーラムで文部科学大臣賞を受賞

第 65 回不戦のつどい像前集会

第 65 回不戦のつどいは、12 月 5 日（水）に大阪いばらきキャンパス（OIC）、6 日（木）にびわこ・くさつキャンパス（BKC）、7 日（金）に衣笠キャンパスにおいて像前集会が開催されました。

衣笠キャンパスでは「わだつみ像」前に、学生・院生、教職員、学園役職者、学園関係者、地域の皆さんや校友等の 135 名が集い、黙祷に続いて山本朔学友会中央常任委員長、吉田美喜夫総長、本田稔教職員組合委員長が不戦・平和への誓いを表明しました。

山本朔学友会中央常任委員長は「若い世代が当事者意識を持って歴史を学び、先人達から多くの教訓を学んで同じ過ちを繰り返さないことが平和な未来を拓くことになる」と述べました。吉田美喜夫総長は「戦争そのものを経験した人、戦争後の辛い記憶が生々しく残っている人たちが少なくなっている現在において、戦争体験を風化させるのではなく、次の世代にしっかりと引き継いでいくことが大事であり」、「1953 年に本学に

迎えたわだつみ像の台座に刻まれた『未来を信じ未来に生きる』という末川博先生の言葉には、立命館で学んだ学生が平和な未来の世界の担い手になってほしいという意味が込められている」と述べました。本田稔教職員組合委員長は、哲学者の梅原猛さんのことばを引用し「戦争で死んでいった若い命は、海の神・わだつみとなり、今私たちに訴えかけています。戦争の歴史を学べ、平和な未来を築け、学問の罪深さを知りそれを克服せよ、平和のための学問を築きあげよ、そのための羅針盤は平和であり民主主義である」、「本学には戦争と平和、学問のあり方を自由に議論できる環境があり、その取り組みを続けていきたい」と述べました。

最後に不戦のつどいに参加した一同が「わだつみ像」前に献花を行い、戦争の歴史を主体的に学ぶこと、学んだ歴史を次の世代に継承すること、教育・研究機関として平和の担い手を育てること、そして改めて二度と学生を戦地に送らない決意を固めました。



入館者状況（2018 年 10 月～2019 年 1 月）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	25	27	26	24	25	19	26	24	20	22	—	—	238
入館者数	1,903	4,423	3,562	1,863	2,163	1,672	9,386	7,282	1,957	—	—	—	34,211
累計（開館当初からの入館者数）													1,103,499
特別展	9/16～11/11 特別展「世界報道写真展2018—WORLD PRESS PHOTO 18—」 9/16～10/3 大分会場：立命館アジア太平洋大学 A棟コンベンションホール 1,501 10/6～10/28 京都会場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール 6,911 10/30～11/11 滋賀会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポック立命21 エポックホール 968 11/6～12/16 秋季特別展「8月6日」平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築プロジェクト成果展示 7,890												
ミニ企画展示	10/7～12/16 第119回 第12回立命館附属校平和と教育実践展示 — 1/17～1/31 第120回 わたしたちも撮りたい！～ネワールのひとびとがみる生活文化～ —												
講演会ほか	10/2 映画と講演の夕べ「ベトナム戦争とは何だったのか」（共催）/ キャンパスプラザ京都 70 10/11 メディア資料研究会 第10回「人間の渦巻」をつくり出す—『週刊アンボ』と小田実— 報告者：福井優氏（立命館大学大学院社会学研究科前期博士課程） 7 特別展「世界報道写真展 2018」関連企画 10/19 ・講演会「写真で伝える仕事—世界の子どもたちと向き合って—」 講師：安田菜津紀氏（フォトジャーナリスト） 85 10/27 ・ゴスペルコンサート「Make the world peace —平和への音色—」 演奏者：同志社大学音楽ボランティア・ゴスペルサークル「New Songs」（インターサークル） 45 10/27 フランチェスカ・ボツリ講演会 ネット時代におけるイタリアのジャーナリズム（協力） 11/6 講演会「海のホーチミン・ルート」（共催）/ 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム 70 12/13 メディア資料研究会 第11回「漫画と戦争—やなせたかしと水木しげるの戦場体験をめぐる—」 報告者：山口一樹氏（立命館大学大学院文学研究科後期博士課程） 11 秋季特別展「8月6日」関連企画 科研究費挑戦的萌芽研究 平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築プロジェクト 11/17 ・第10回ワークショップ「戦争体験『語り』の継承—広島、長崎、沖縄、国立を事例として—」講師：外池智氏（秋田大学教授） 26 12/8 ・第11回ワークショップ「くにたち原爆・戦争体験 伝承者講話」講師：沢村智恵子氏（くにたち原爆・戦争体験伝承者） 25 12/15 ・秋季特別展ラウンドテーブル（展示評座談会） 討論者：浜日出夫氏（慶應義塾大学教授）松尾浩一郎氏（帝京大学教授）青木深氏（東京女子大学教授） モデレーター：根本雅也氏（衣笠研究機構プロジェクト研究員・国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー） 15 〈平和教育研究センター関連企画〉 12/4 ・ベトナムフィルム映画上映会 講師：ジェニー・チャン・レ氏（映画プロデューサー）/ 充光館 JK001 38 12/14 ・世界人権宣言 70 周年記念企画・不戦のつどい協賛企画「世界人権宣言を捉えなおす」/ 存心館 ZS311 報告者：業師寺公夫氏（立命館大学大学院法務研究科教授）徳川信治氏（立命館大学法学部教授） 吾郷眞一氏（立命館大学法学部教授・国際平和ミュージアム館長） 32												

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

2018 年を振り返るとベトナム関連の取り組みが印象的でした。5 月にはベトナム枯葉剤被害者協会の方々をお迎えしました。常設展示のベトナム戦争のコーナーで「体がかっつた双子のベトとドクを見守る」と紹介されているフォン博士が来館されました。フォン博士から「私たちの次世代が将来、幸福と平和な世界に住むことができるように強い意志を持ち続けます」とのメッセージをいただきました。11 月には『海のホーチミン・ルート』の著者であるグエン・ゴックさんをお迎えし、なぜ小国ベトナムがアメリカに勝ったのかについて参加者とともに考える機会をもちました。12 月には「ベトナムフィルム映画上映会」を開催し、「サイゴンの少女ニュン」と「ニクソンノー」の 2 本の映画を上映しました。これらの取り組みは日本側での平和友好団体の地道で継続的な努力が支えているものです。様々なひとびとと繋がり、平和への一歩を踏み出したいと思えます。（編集部）

立命館大学国際平和ミュージアム 2019 年度春季特別展 「よみがえる沖縄 1935」

KYOTO
GRAPHIE
international
photography festival

1. 開催趣旨

アジア太平洋戦争末期、過酷な戦火にさらされた沖縄。その10年前、沖縄には人々の平和な暮らしがありました。にぎわう那覇の市場、のどかな軌道馬車、糸満の漁師たちが暮らす一方で忍び寄る戦争の影。朝日新聞の記者が1935年に撮影し、「海洋ニッポン」という記事に掲載した写真には、貴重な戦前の沖縄の営みが写し取られていました。約80年を経て大阪本社で見つかった277コマのネガから、厳選した約100点の写真と、朝日新聞・沖縄タイムスの共同取材時の解説を加えて、「1935年の沖縄」を描き出す写真展を開催します。あわせて当館所蔵の沖縄関連資料も展示します。

沖縄戦で一変した沖縄。戦前の日常生活の中にも戦争の影がひそみ、その後の沖縄と日本全体がたどった道とを考えると、1935年以降、現代へと繋がる沖縄をめぐる問題にせまります。

なお本展は KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2019 アソシエイテッドプログラムに参加しています。

2. 企画概要

会 期：2019年4月13日（土）～6月29日（土）

開館時間：9：30～16：30（入館は16：00まで）

休 館 日：日曜日（ただし、4月14日、5月5日は開館）

4月30日（火）、5月2日（木）、5月6日（月）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階中野記念ホール

参 観 料：大人400円（350円）、中・高生300円（250円）、小学生200円（150円）

（ ）内は20名以上の団体料金

※常設展見学可

※国際博物館の日（5月18日）は無料公開。

※KYOTOGRAPHIE 共通パスポート提示で当写真展のみ1回限り無料

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム・朝日新聞社・沖縄タイムス社

協 力：東京大学大学院情報学環・渡邊英徳研究室、

KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭、フレームマン

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、

京都市内博物館施設連絡協議会、京都新聞、KBS 京都、朝日放送

3. 関連企画：座談会&ギャラリートーク ネガ発見秘話と記者たちの思い

日 時：2019年4月27日（土） 13：00～15：00

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー

登 壇 者：清水隆氏 朝日新聞大阪本社フォトアーカイブ

吉田拓史氏 朝日新聞社西部本社報道センター

堀川幸太郎氏 沖縄タイムス社編集局社会部南部報道部

※企画のみ参加無料・申込不要



1935年 沖縄 糸満 魚を運ぶ漁師
（朝日新聞社提供）



版画 市場の女たち（儀間比呂志画 館蔵）

世界報道写真展 2019 —WORLD PRESS PHOTO 19—

滋賀会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

会 期：2019年9月23日（月・祝）～10月5日（土）（会期中無休）

京都会場（立命館大学国際平和ミュージアム）

会 期：2019年10月7日（月）～10月31日（木）

休館日：10月13日（日）、15日（火）、20日（日）、23日（水）、27日（日）

大分会場（立命館アジア太平洋大学）

会 期：2019年11月3日（日・祝）～11月15日（金）（会期中無休）

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で62回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。



世界報道写真展 2018 「人々の部 組写真」 組写真 1位
アダム・ファーガソン
オーストラリア、ニューヨーク・タイムズに提供
2017年9月21日
ナイジェリアで「ボコ・ハラム」の戦闘員に誘拐された少女の肖像。爆発物を身体に縛りつけられ、自爆するよう命じられたが、逃げ出し、助けを得ることができた。

詳細はホームページでお知らせいたします。

INFORMATION

ミニ企画展示室

第122回

「東日本大震災の記憶 ～「3.11」の“これまで”と“これから”～」

会 期：2019年4月1日（月）～4月26日（金）

主 催：志麻克史

展示内容：東日本大震災が発生して8年、「記憶の風化」が危惧されています。写真や刊行物等から、被災地の“これまで”を振り返り、現状を見つめ、復興や支援のあり方など“これから”を考えます。



「防災対策庁舎（宮城県南三陸町）」

第123回

「写真展：生きて、繋いで—被爆三世の家族写真—」

会 期：2019年5月1日（水・祝）～5月25日（土）

主 催：被爆三世これからの私たちは project

展示内容：“孫だから、聞けることもある—”

原爆投下から74年。祖父母から実体験を直接聞ける最後の世代である私たちは、その記憶をどう受け止め、次の世代へ伝えていけば良いのだろうか。今後を考えるきっかけの写真展です。



「生きて、繋いで」

第124回

「キューバと日本の絆をさがして」

会 期：2019年6月3日（月）～6月28日（金）

主 催：安保寛尚（立命館大学法学部准教授）

展示内容：日本人がキューバに渡って120周年を迎えた2018年、立命館大学でこれを記念する留学プログラムを開催しました。本展では、日系移民のコミュニティや日本文化愛好団体との交流会の様子など、キューバの現在を紹介しつづけます。



「日系1～3世のみなさんと、青年の島にて」

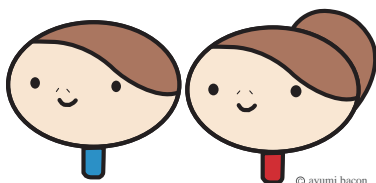
夏休み子ども企画

「へいわ」ってなに?? 2019

2019年7月27日（土）

夏休みに見て・感じて・考えて！平和について一緒に考えましょう！！

国際平和ミュージアム名誉館長による平和のお話を聞いたり、大学のお兄さん、お姉さんと一緒に平和について考えてみませんか？夏休みの自由研究にも役立つ企画を予定しています。



教員向け見学説明会

2019年7月23日（火）～25日（木）

8月19日（月）～21日（水）

夏休み期間に小学校・中学校の教職員を対象とした見学説明会を開催します（無料・要申込）。安齋名誉館長による平和講義体験、ボランティアガイドの案内による見学体験、貸出教材キットの紹介、団体見学個別相談会を行います。

*6/24（月）

申込受付開始



昨年の様子

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第26巻第3号（通巻76号）2019年3月1日発行
編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899
<http://www.ritsumeiji.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館会議
INTERNATIONAL MUSEUM OF PEACE